ポラリスを仰ぐ北の大地から

脊髄再生医療

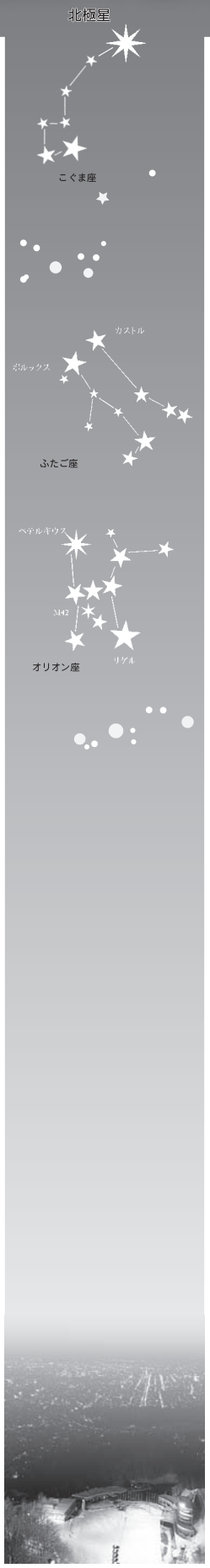
札幌医科大学医師会　会長　山下　敏彦

「脳や脊髄などの中枢神経は、いったん損傷すると元通りにはならない」。これは、20世紀初頭のノーベル賞解剖学者、ラモン・イ・カハール博士の言葉です。わが国では年間約5,000人の脊髄損傷患者が発生しますが、中にはスポーツなどにより受傷した若年者も少なからず含まれ、重いハンディキャップを背負うこととなります。しかし、冒頭のカハール博士の言葉通り、リハビリ以外には麻痺に対する有効な治療法がないのが現状です。

札幌医科大学では、神経再生医療科の本望修教授が中心となり、これまで骨髄間葉系幹細胞（MSC）の経静脈的投与が、脳梗塞や脊髄損傷に対して顕著な治療効果を示すことを基礎的研究により明らかにしてきました。この研究成果に基づき、2014年１月より整形外科と神経再生医療科が連携して、脊髄損傷患者に対する自己培養MSC静脈投与の臨床試験を、薬事法下の医師主導治験として開始しています。対象患者の適格基準は、発症から14日以内で、年齢が20～70歳、ASIA機能障害スケール（AIS）がA，B，Cの重度損傷例です。

これまでに９症例に細胞治療を実施しました。全例においてAISで１段階以上の改善が得られています。AIS　Bの１症例とCの５症例では、細胞投与翌日から１段階の回復を示しました。すべての症例において有害事象は認めていません。このような良好な治療成績を踏まえ、本年２月には、厚労省から、本治験の細胞製剤が「先駆け審査指定制度」の対象として指定を受けました。これにより、医薬品としての承認審査期間が短縮され、実用化に向けて加速されるものと期待されます。

脊髄損傷患者さんが失った機能を取り戻すことが可能となる、世界初の画期的な治療法が、北海道から発信される日も遠くありません。



高校生のための心肺蘇生法講習会 in室蘭

室蘭市医師会　会長　稲川　　昭

室蘭市医師会長に就任して７年になります。郡市医師会の事業はそれなりに多岐にわたりますが、室蘭市医師会として独自にできる事業はないかなと考えておりました。

そのような時、平成16年に一般人がAEDを使用し、救命行為を行うことが可能になりましたが、なかなか普及しない報道を見聞きし、何とかできないものかと考えておりました。理事の一人から、従来の大型人形を使った少人数・長時間の救命講習より、実技重視のプッシュ・クリック音付の“CPR&AED学習キット（ミニアン）”が手ごろな値段で、短時間で学習効果も高いことを教えてもらいました。

ターゲットを未来のバイスタンダーとなる可能性の高い高校生に絞りました。胆振教育局の理解も得られ、命を大切にする授業の一環として、T高校の２年生、195名を対象として“高校生のための心肺蘇生法講習”を平成22年８月に立ち上げ、実施しました。体育館に200名の元気な高校生！どれだけうるさく大変になるかと思いましたが、スライド講習の麻酔科医の巧妙な話術にも助けられ、整然と集中された講習会でした。実際の実技は室蘭市・登別市消防の救急隊員、３総合病院の麻酔科医・循環器内科医、看護師など総勢35名が８名ずつの25班に対応し、和やかに実施されていきました。

その後のアンケートで学生・教師にも好評で、６年間継続でき、約1,200名の高校生に受講終了書を渡すことができております。近年は実際にAEDの使用を救急救命士にやってもらい、高校生から“かっこいい！”と評判になり、看護師・救急隊員になりたいと志望が増えていると聞いております。各地に広がることを期待して！